

あなた達のそばに居たい
い

リュグナー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なんでもそつなくこなすが、そのどれでも一番を取れない少女。

そんな少女がもし、香澄たちに刺激され、サポートを務めたり、熱が入り、上位に食い込めるようになる。そんなお話。

初めて女主人公に挑戦します！ですので、暖かく見ていただきたいと思います。

目次

第1話「出会い」

1

第1話「出会い」

主人公：秋原葉月。花咲川高校に通う高校一年生。クラスは香澄たちと一緒に。全体的に平均より少し上な少女。普通ではないことをやろうとしてギターを練習するが、ギリギリ上手いと言えるライン。

好きなものは、肉じゃが、コロツケ

嫌いなものは、ナスと納豆

性格：可もなく不可もなくといったところ。真面目ぶるわけでもなく不真面目でもない。基本的に慎重で危ないことには近づかない。また、挑戦するややつたことがないことは極力避けて通る。友好的ではあるが相性の悪そうな人とは関わらない（こころがその一人である）。しかし、退屈な日常は嫌いである。

原作ストーリーに大きく関わることはないが、ちよつとしたアドバイスや相談に乗ったりするサポート的存在。

『プロローグ?』

今日は入学式の日で晴れて高校一年になる。とは、言ったもののいつもと変わらない通学路。花咲川でエレベーター式で上がったからだ。いつも通りの道を通りながら、高校生になるという新鮮な気持ちがあつて少し不思議な感じ。いつもと変わらないはずなのに少し変わつて見える。……義務教育という枷から解き放たれたからだろうか？違うか。多分……。

「外部からくる人が気になつてるからかな」

そう呟き、ふと空を見上げる。

春の穏やかな空だ。暖かく、そして少し冷たさを残した風が頬を撫でる。

ひらひらと桜が舞い散る。腕をを少し前に出して手を開けた。そこに桜の花びらが降りてきた。桜を見上げ、桜が散る様を見て美しく感じた。

気づくと私は期待と好奇心に駆られていた。そうだ、きつと私は……。

「学校が楽しみなんだ……！」

遅れるわけにもいかない。桜を見るのはほどほどにして学校へと向かった。

学校の校門が見えてきた。幾つもの見知った顔が向こう側から来ている。

「おはよう」

「おはよう！久しぶり！」

「そうだね。久しぶり」

中学の頃のクラスメイトたちと挨拶を交わす。やっぱり変わらないな。

校門を通り、クラス分けを見るためそのまま歩いてた。その時、後ろから誰かが走っているような足音が聞こえてきた。

「今日からお世話になります！」

その声に驚き、私は振り向いた。そこにいたのは……。

「猫耳？」

猫耳？の髪型をした少女だった。その少女は周りから見られて少し恥ずかしいそうにしてこちらに歩いてきた。私の前で止まった。

「おはよう！」

「おはよう」

「もしかしてあなたも新入生？」

「そうだよ。ところで君は？」

「私？私は戸山香澄！」

「戸山さんね「香澄！」…香澄。私は秋原葉月、よろしくね」

「うん！よろしく、葉月ちゃん！」

「じゃあ、クラス分け見に行こ！」

「そうだね」

戸や……香澄と一緒にクラス分けを見る。自分の名前を探す……。

「あつた……！A組だ」

「え？ほんと！私もA組だよ！」

どうやら同じクラスになったようだ。これで退屈しなさそう。

ふと、微かにパンの香りがした。後ろを振り向く。そこにはポニーテールの少女、山吹沙綾がいた。

「あ、山吹さん？」

「あー、秋原さんじゃん。久しぶり」

「うん、久しぶり」

「葉月ちゃん、知り合い？」

「うん、中学の時のクラスメイト。パン屋の看板娘の山吹沙綾だよ」

「ちよ、やめてよね、そういうの。…間違つてはないけど……」

「パン屋?!いいなあ。……ちよつとお腹空いちやつた……」

「じゃあ、手出して。これでも食べて…パンじゃないけど」

「いやつたー！飴だ！ありがとう、さーや！」

「あ、うん。どういたしまして、戸山さん「香澄でいいよ！」香澄……」

「山吹さんも香澄に誑かされちゃった」

「言い方酷くない？」

「私、もう友達二人も出来ちゃった！」

「だって…さーやちゃん？」

「…わかったよ。葉月」

「ところでさーや、クラスはどこ？」

「私もA組」

「みんな一緒だね」

人が増えてきた。確認も終わったし邪魔にならないように教室に移動しようか。

「そろそろ行こうよ」

「うん！」

「はーい」

香澄とさーやと一緒に教室に向かいながら、何かが始まる予感がしていた。